

寛正く文明期の連歌における「七賢風」と「宗祇風」

勢田 勝郭

Shichiken-style and Sougi-style of Renga in 1453~1487

Katsuhiko SETA

寛正期から文明期にかけて、連歌の風体はいわゆる「七賢風」から「宗祇風」へと大きく変貌を遂げる。本稿は、その経緯を、実際の連歌の場における作品たる百韻千句資料を直接取り扱うことによって、客観的なデータから跡付けようとするものである。

後世「中古」と呼ばれる応永く永享期の連歌の風体を否定して成立したのが、宗祇の風体であり、宗祇の連歌は、その宗祇の風体を、心敬・専順を介して継承・発展させたものであるというのが、現在、連歌史の通説とされている所である。つまり、応永く永享期の連歌と宗祇以下の七賢の連歌との間では、その風体の断絶性が、七賢の連歌と宗祇の連歌との間には、その継続性の説明が今まで研究者の主たる対象とされて来たと言えよう。それは、基本的には正しい把握であることに間違いはないが、一方、実際に、七賢と呼ばれる作者達の連歌と、宗祇連歌の代表作とされる長享二年正月二十三日「何人」や延徳三年十月二十日「何人」などを読み比べてみると、両者の間には、かなり判然とした相異が看取できることも事実である。本稿は、七賢の連歌風体（以下、「七賢風」と宗祇のそれ（以下、「宗祇風」との関係）との関係を、後者は前者を継承するものであったことを認めつつも、両者互いに対比されるべきものでもあるとの立場に立った上で、

(Ⅰ) 後者が、前者に比較して、どのように変貌を遂げたものであるかを明らかにし、
(Ⅱ) その新風が、どのようにして連歌界に普及していったかを、実際の連歌の場における作品たる百韻千句資料を直接取り扱うことによって、客観的なデータから跡付けようとするものである。

「七賢風」と「宗祇風」——『享徳二年千句』と『葉守千句』の比較検討

「七賢風」の作品のサンプルとして、『享徳二年千句』第四「何人」百韻（注1）、「宗祇風」の作品のサンプルとして、『葉守千句』第四「薄何」百韻（注2）を採りあげる。前者は、七賢の中、宗祇・心敬・専順の三名が一座するもの、後者は、その三十四年後の長享元年十二月に興行された宗祇以下、肖柏・宗長など、宗祇一門による作品である。

①これは、七賢というよりも、むしろ宗祇個人の作風の特徴というべきかも知れないが、彼の連歌に名所の句が非常に多いことは、宗祇が『角田川』で指摘している所である（注3）。それに対して、「大かた、名所の事は、（中略）常に侍らぬ名所を、詠むべからずとなり」というのが、宗祇の態度である。当然、宗祇風の連歌では、名所の句が減少すると予想されるが、『享徳二年千句』第四「何人」と『葉守千句』

第四「薄何」における名所の句を列挙し比較すると、以下のごとくで、前者では十五句を数えるのに対し、後者においては、一句が存在するのみである。

- | | |
|---------------------|------------------|
| ▽『享徳二年千句』第四「何人」 | ▽『葉守千句』第四「薄何」 |
| 尋ね入野の鈴虫の声 (一四) | 音羽川砌も岩も古りはて (三五) |
| 天の川渚の岡に波あれて (一九) | |
| 秋ははや猪名の山陰うち時雨れ (二七) | |
| ぬるゝ木曾路の麻の狭衣 (二八) | |
| 誰か知る高野の室のその昔 (三五) | |
| 那智の湊の秋の入り塩 (五〇) | |
| 御熊野や夕なぎの葉の浦さびて (五一) | |
| 船のぼりえぬ富士のはや川 (六二) | |
| 箱根山はしり下れば湯本にて (六三) | |
| 秋寒き田上川の網代もり (八三) | |
| 吉備の山中をしのぎて吹く風に (八七) | |
| 波かよ霞も白く鳴海湯 (九一) | |
| 船路の花の生の浦梨 (九二) | |
| 雲も憂し姨捨山の秋の暮 (九七) | |
| 霧やはかゝる風越の峰 (九八) | |

②宗祇風連歌の特徴として、まず、第一にあげられるべきは、句の仕立の多様性という点である。例えば「惜しみもあへず春ぞ暮れゆく」という前句に対し、どのような付句が可能かを考えてみる。「吹く風に残りなく散る桜花」と、平凡に付けることもできるが、また「山風の吹くにも散らぬ花もがな」と、願望表現を用いて付句を仕立てることもできる。「心なく花な散らしそ山風」と禁止(命令)表現を用いることもできるし、「残る花見捨てゝいづこ帰る雁」などと、所謂「疑問詞」を用いて、疑問・反語表現で付けることもできる。そして、どのような仕立を用いるかは、句の作者の意思に委ねられ、その出された句を懐紙に書きとめる(採用する)かどうかは、一座の宗匠の意思に委ねられる。そこで、『享徳二年千句』第四「何人」と『葉守千句』第四「薄何」について、願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いて仕立てられた句を列挙すると、前者においては九句であるのに対し、後者では十八句と、二倍の増加を示している。

- | | |
|---------------------|--------------------|
| ▽『享徳二年千句』第四「何人」 | ▽『葉守千句』第四「薄何」 |
| 月と誰が中の衣ぞ秋の雲 (〇一) | いづく都とかへり見る空 (〇六) |
| いづくにか消えし氷は流るらむ (〇七) | 身も弱れとやつれなかるらむ (二六) |

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 忍ぶる心通ふとも知れ (二四) | 山を誰木綿付鳥に越えぬらむ (一九) |
| 誰か知る高野の室のその昔 (三五) | 何にか人の身は帰るらむ (三〇) |
| 幾千代の菊の下露つもるらむ (三七) | 憂きをたゞ忘れがたみに慰めよ (三三) |
| 春はとへやと思ふ柴の戸 (五四) | 風吹かぬ山路も花はいかならむ (四五) |
| つたへ聞け君が言葉の謀 (六五) | 誰住みて峰に砧を急ぐらむ (五五) |
| 友はなど身をも我をも捨てつらむ (六九) | いつまでの川辺の橋の朽ちぬらむ (五九) |
| 誰がつくるその古ごとく残るらむ (七五) | うしろ安くも頼まれよかし (六九) |
| | 誰をかとはむ知らぬ夕暮 (七〇) |
| | さきだゝば花もあはれめ草の原 (七一) |
| | 鶯も鳴けいつを待つらむ (七四) |
| | 何の罪残りてかかく生まるらむ (七七) |
| | 心深さをよしやあらはせ (七八) |
| | 物怪となりても人に知らればや (七九) |
| | 注連の中なる花な手折りそ (八二) |
| | 偽りと知れどもなとか待たるらむ (九七) |
| | 小菽が露は風も乱すな (〇〇) |

③宗祇風連歌の特徴として今一つあげられるべきは、著しい心情性という点である。その表象の一つとして、「憂し」とか「寂し」とか「悲し」とか「惜し」とか、端的に心情を表現する形容詞(以下、便宜的に「心情形容詞」と呼ぶ)が多用される。『享徳二年千句』第四「何人」と『葉守千句』第四「薄何」についてそれを数えてみると(注4)、前者では、「憂し」が四例、「惜し」が一例、「悲し」が一例の三種、六例に対し、後者では、「憂し」が三例(第二六・三三・九六句)、「寂し」が三例(第二三・五八・八九句)、「悲し」が二例(第一四・七六句)、「はかなし」が二例(第三二・五〇句)(注5)、「うしろ安し」が一例(第六八句)、「覚束なし」が一例(第六九句)、「つらし」が一例(第八一句)、「恨めし」が一例(第九六句)、「あぢきなし」が一例(第九八句)の九種一五例で、二・五倍に増加している。列挙すると、以下のごとくである、

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ▽『享徳二年千句』第四「何人」 | ▽『葉守千句』第四「薄何」 |
| 立ちよれば踏む跡惜しく花ちりて (〇九) | あはに結べる契り悲しも (一四) |
| 徒らに住む世の憂き身古りにけり (一一) | さびしさの限りか霞む夕ま暮 (二三) |
| 憂しや仏の後の常闇 (四六) | 今日も憂き世ぞよしや恨みじ (二六) |
| なさけに酔へる後ぞ悲しき (七〇) | 飽かざりし中と慕ふはかなさ (三二) |
| 憂き後朝は明けはてにけり (八〇) | 憂きをたゞ忘れがたみに慰めよ (三三) |
| 雲も憂し姨捨山の秋の暮 (九七) | ひとりば寝じの驚のはかなさ (五〇) |

④「浦の苔屋に松風ぞ吹く」という句を体言止めで仕立てようとすると、「浦の苔屋に吹くは松風」とするのが普通であろう。しかし、「浦の苔屋に吹く松の風」とすることもできるし、もう工夫して「浦の苔屋の松に吹く風」とすれば、口調はずっとなだらかになる。この体言止め下句の末七字の仕立について、次の五類型を立てて考える。

- (i) サ止め型……例…夢のはかなき、世の中の憂さ
 - (ii) 二五型……例…たゞ／春の空、また／仮枕
 - (iii) 三四型……例…秋の夕暮、遠き／山の端
 - (iv) 五二型……例…遠方の雲、春の夜の夢
 - (v) 七型……例…山時鳥、大和言の葉
- 古道さびし柳ちる里 (五八)
うしろ安くも頼まれよかし (六八)
あだなれば覚束なきを思ひにて (六九)
女のうへぞ見るも悲しき (七六)
神やなほ乱れたる世のつらからむ (八一)
陰さびし楸うち散る露の暮 (八九)
憂きに耐へたる恋は恨めし (九六)
秋の夕べのあぢきなき空 (九八)

応永く永享期の連歌では、体言止め下句の末七字の仕立に好まれたのは、圧倒的に(iii)の三四型であったが、その傾向は、七賢の時代にも変わらせず、『享徳二年千句』第四「何人」においても、三六句の体言止め下句中、三四型が二四句を占める。それに対し、『葉守千句』第四「薄何」では、五句(二九句中)を数えるのみである。それぞれ列挙すると、以下のごとくである。

- | | |
|---------------------|--------------------|
| ▽『享徳二年千句』第四「何人」 | ▽『葉守千句』第四「薄何」 |
| 野分の風の かよふ／山もと (四〇) | 雨の中なる 野辺の／里々 (〇八) |
| 出づる朝日の 浮かぶ／海づら (〇六) | 誰をかとはむ 知らぬ／夕暮 (七〇) |
| 春浅くなる 雪の／木隠れ (〇八) | あらぬ跡とも 霞む／故郷 (八四) |
| 心ありとも 見えぬ／山賤 (二〇) | 月さし出づる 船の／白波 (八六) |
| 風も音する 森の／下水 (二〇) | 渡る時雨も 荒き／浜荻 (八八) |
| 友待つ暮の 門の／やすらひ (二二) | |
| ぬるゝ木曾路の 麻の／狭衣 (二八) | |
| さそふや波の 花の／春風 (三二) | |
| 我が頼みなる 雁の／玉章 (四〇) | |
| さだかに匂ふ 梅の／朝風 (四四) | |

- (i) 「サ止め型」が好まれるようになることである。『享徳二年千句』第四「何人」と『葉守千句』第四「薄何」について該当句を列挙すると、前者には該当する例が存在しないのに対し、後者には、以下のごとく八例が数えられる。
- 憂きや仏の 後の／常闇 (四六)
那智の湊の 秋の／入り塩 (五〇)
春はとへやと 思ふ／柴の戸 (五四)
帰らむ道も 知らぬ／古寺 (五八)
船のぼりえぬ 富士の／はや川 (六二)
身に汗ながし 急ぐ／旅人 (六四)
とへど答へぬ 宿の／古人 (六八)
明けなむとする 月の／入り方 (七二)
岨なる橋や 霧の／うもれ木 (七四)
困ひまばらに 見ゆる／草の屋 (七八)
火をとる虫の あだの／玉の緒 (八二)
粟の葉高く 茂る／古畑 (八八)
船路の花の 生の／浦梨 (九二)
春や隣を しむる／梅が香 (〇〇)

⑤体言止め下句の末七字の仕立について、もう一つの大きな相違は、宗祇風の連歌では(i)の「サ止め型」が好まれるようになることである。『享徳二年千句』第四「何人」と『葉守千句』第四「薄何」について該当句を列挙すると、前者には該当する例が存在しないのに対し、後者には、以下のごとく八例が数えられる。

- | | |
|-----------------|---------------------|
| ▽『享徳二年千句』第四「何人」 | ▽『葉守千句』第四「薄何」 |
| (該当例なし) | 起き出づる夜の 鐘のさやけさ (四〇) |
| | 急ぐもしるき 道の遥けさ (二〇) |
| | 飽かざりし中と 慕ふはかなさ (三二) |
| | 滝かすかなる 雪の静けさ (三六) |
| | 露の命の かゝるあはれさ (四〇) |
| | ひとり寝の 驚のはかなさ (五〇) |
| | 風も声とき 山の寒けさ (五四) |
| | 思ひを遠く かけし愚かさ (六〇) |

論点を明瞭にしようとして、わざと両者の差異がはっきりと看取できる作品を選んだのであるが、今、列挙した所の、

- ①名所句の減少
- ②願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加
- ③心情形容詞の増加
- ④体言止め下句末七字「三四型」の減少

		第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	平均	指標値
享徳二年千句	①	6	11	9	15	12	10	9	9	8	12	10.1	0
	②	8	13	11	9	8	11	14	13	12	10	10.9	0
	③	4	4	6	6	7	5	4	5	4	6	5.3	0
	④	24	21	18	24	17	17	22	21	25	16	20.5	0
	⑤	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0.4	0
葉守千句	①	1	3	3	1	1	1	4	1	5	2	2.2	100
	②	23	21	15	18	19	17	22	16	22	17	19.0	100
	③	8	11	14	15	14	9	9	16	8	14	11.8	100
	④	14	14	14	5	10	12	14	12	13	8	11.6	100
	⑤	2	4	1	8	3	4	1	7	1	4	3.5	100

		第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	平均	指標値
熊野千句	①	5	4	5	9	8	7	9	9	5	8	6.9	41
	②	9	12	14	10	10	7	8	10	10	8	9.8	-14
	③	4	5	7	9	6	5	7	8	5	8	6.4	17
	④	20	19	15	18	17	16	14	13	17	16	16.5	45
	⑤	1	0	1	2	2	0	0	1	0	2	0.9	16
河越千句	①	3	6	5	7	7	9	6	4	5	4	5.6	57
	②	11	9	7	12	6	10	13	10	15	13	10.6	-4
	③	11	11	10	15	8	8	8	10	12	13	10.6	82
	④	14	17	14	7	17	18	18	14	13	13	14.5	67
	⑤	2	1	0	1	0	2	2	2	1	3	1.4	32
三島千句	①	8	8	3	3	3	8	2	4	8	6	5.3	61
	②	18	17	21	18	15	13	19	17	17	19	17.4	81
	③	10	5	9	6	8	10	11	8	7	6	8.0	42
	④	13	16	15	13	21	16	21	13	19	19	16.6	44
	⑤	2	4	0	2	2	2	1	4	1	2	2.0	52
美濃千句	①	7	5	6	5	8	8	4	4	2	2	5.1	63
	②	16	8	15	13	16	8	7	14	11	16	12.4	19
	③	9	8	5	10	7	9	5	9	13	8	8.3	46
	④	16	22	19	18	17	12	18	20	18	17	17.6	33
	⑤	0	1	1	3	3	2	0	0	4	0	1.4	32
因幡千句	①	6	7	3	10	5	7	7	8	7	7	6.7	43
	②	8	7	8	8	17	10	8	7	5	13	8.8	-26
	③	7	9	7	7	4	6	8	7	5	7	6.7	22
	④	18	16	26	20	15	15	16	18	19	13	17.6	33
	⑤	2	2	1	0	1	2	1	1	3	1	1.4	32
表佐千句	①	4	6	11	5	3	4	7	2	0	6	4.8	67
	②	15	8	15	13	17	9	7	14	13	17	12.8	23
	③	7	6	10	8	8	9	9	10	13	9	8.9	55
	④	15	20	19	20	20	13	11	15	19	12	16.4	46
	⑤	0	1	0	2	1	3	1	3	2	4	1.7	42

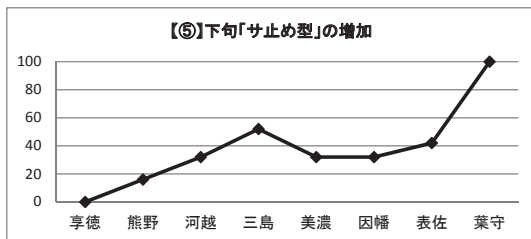
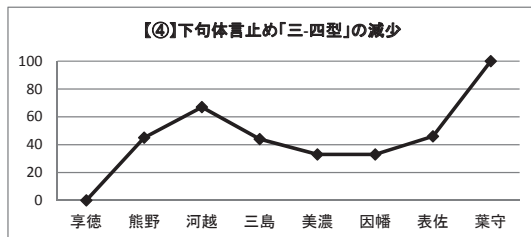
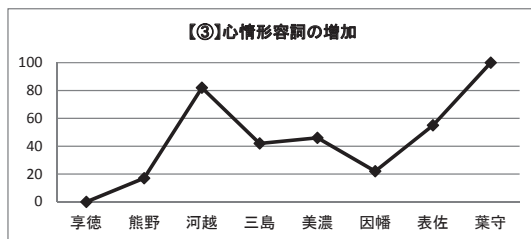
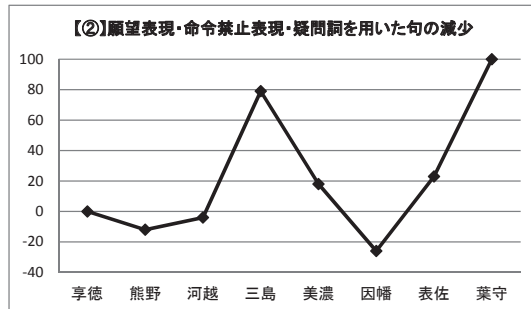
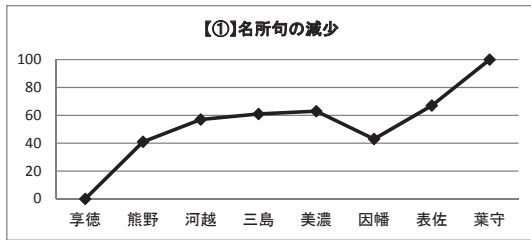
「判然とした」と言えるほどの相異のあることが確認できる(注6)。

各項目について千句六巻を調査する

享徳二年から長享元年の間に、連歌の風体は以上のごとく変化した。それは、どのような経過をたどったものか。その間に成立した心敬・専順・宗祇が一座する「千句」(ただし、百韻十巻が揃っているもの)としては、『熊野千句』(寛正五年、心敬・専順・宗祇他)、『河越千句』(文明二年、心敬・宗祇他)、『三島千句』(文明三年、宗祇独吟)、『美濃千句』(文明四年、専順・宗祇他)、『因幡千句』(文明七年、専順他)、『表佐千句』(文明八年、専順・宗祇他)の六種が現存する。その六種について、『享徳二年千句』『葉守千句』と同様の調査を行なうと、順に【表Ⅱ】の結果が得られる(表

は、『享徳二年千句』の最小値は一七(第五「何路」と第六「白何」)であるのに対し、『葉守千句』の最大値でも、それを下回って一四(第一「何人」と第二「何路」と第三「白何」と第七「一字露頭」)である。また、下句「サ止め型」の句は、一句をボーダーとして、『享徳二年千句』の場合は全てそれ以下、『葉守千句』の場合は全てそれ以上である。以上、両千句の間には、ほとんど

⑤下句「サ止め型」の増加という現象が、決して偶然的なものではないことは、各項目について千句全体に調査を及ぼせば、すぐに明らかとなる。結果は【表Ⅰ】のごとくである(表中「指標値」の数値については後述)。注意されたいのは、『享徳二年千句』を構成する十巻の百韻中、名所句の数が最も少ないものは第一「何玉」の六句であるが、『葉守千句』の場合、十巻中最多の第九「朝何」でも五句にとどまり、それを下回っているという点である。同様に、願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の数については、『享徳二年千句』における最大値が第七「手何」の一四句であるのに対し、『葉守千句』の場合は最少でも一五句(第三「白何」)である。心情形容詞の例数でも、『享徳二年千句』における最大値が七(第五「何路」)に対し、『葉守千句』の最小値でも、それを越えた八(第一「何人」と第九「朝何」)である。体言止め下句末七字「三四型」の句数



中の「指標値」というのは、『享徳二年千句』の平均値を〇(ゼロ)とし、『葉守千句』の平均値を一〇〇とした場合、その値がどこに当たるかを示す数値である。例えば、『享徳二年千句』の平均値が一〇〇、『葉守千句』の平均値が二二・〇の場合、その数値が一三であれば二五、一六であれば五〇、一九であれば七五が「指標値」となる。七であれば、マイナスイニスが「指標値」となる(注7)。以下①～⑤の各項目について、【表II】の結果を検討する。

①(名所句の減少)について、『享徳二年千句』から『葉守千句』に至る八種の千句の平均値の変化を指標値によって図表にして示すと【①】のごとくとなる。まず『熊野千句』の時点で大きく進み、それが『河越千句』で更に進み、『三島千句』『表佐千句』と、同レベルで推移し、『因幡千句』では一旦『熊野千句』のレベルに後退するが、『表佐千句』では、再度進み、『葉守千句』に至る。これは、「宗祇風」における「名所句の減少」という現象が、心敬・専順の志向を継承し、それを推し進めたものであることを示していると言えよう。

②(願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加)について、同様に指標値によって図表にして示すと【②】のごとくになる。結果は①の場合と大きく相違する。『熊野千句』『河越千句』においては、まだ『享徳二年千句』と同レベル(と言うより、むしろ後退した)数値しか得られず、それが、『三島千句』において、一挙に増加する。

しかし、それも『美濃千句』でかなり後退し、『因幡千句』では、また『享徳二年千句』よりも後退した数値となる。それが『表佐千句』で『美濃千句』のレベルに回復し、『葉守千句』に至る。研究者には今更の念押しになるが、『三島千句』は宗祇の独吟である。そこには、専順の影響も、心敬の影響も入りこむ余地はない。即ち、「願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加」という現象が、宗祇連歌に特有の大きな特徴であると判断される。

③(心情形容詞の増加)について、同様に指標値によって図表にして示すと【③】のごとくになる。『熊野千句』で少し増加した後、『河越千句』で大きく数値を上げる。『三島千句』では、また少し後退し、以下の推移は、ほぼ①②の場合と同様である。『河越千句』は心敬をトップ・メンバーとする作品である。このことから、宗祇連歌における「心情形容詞の増加」という現象は、心敬の志向を継承したものであると推定することもできるかも知れないが、そうすると、同じく心敬をトップ・メンバーとする『熊野千句』の数値が何故低いのかという疑問が生ずる。いくつかの考え方が可能であるが、ことさらな推測は慎み、今は、事実の提示にとどめたい。また、この点で専順の連歌が旧態であることは、『因幡千句』の数値から知れよう。

④(体言止め下句末七字「三・四型」の減少)について、同様に指標値によって図表にして示すと【④】のごとくになる。『熊野千句』で、既に『享徳二年千句』に比べかなり進んだ値が得られ、『河越千句』で更に進む。『三島千句』では『熊野千句』のレベルに戻り、『美濃千句』『因幡千句』『表佐千句』と、ほぼ同レベルで推移し、最後に『葉守千句』に至って再度大きく進む。①の場合と同じく「体言止め下句末七字「三・四型」の減少」という現象も、心敬・専順の志向を継承し、それを推し進めたものであると言えよう。

⑤(下句「サ止め型」の増加)について、同様に図表にして示すと【⑤】のごとくになる。『熊野千句』『河越千句』『三島千句』と、段階的に増加し、『美濃千句』『因幡千句』で、一旦『河越千句』のレベルに戻り、『表佐千句』で少し回復した後、『葉守千句』で大きく増加する。①④の場合と同じく、「下句「サ止め型」の増加」という現象も、心敬・専順の志向を継承し、

それを推し進めたものであると言えよう。

各千句の総括

以上を確認した上で、調査した各千句について総括する。

『熊野千句』……「名所句の減少」と「体言止め下句末七字「三十四型」の減少」の二項目で新しい傾向が看取されるが、他の点では、『享徳二年千句』の値と余り変化はなく、特に「願望表現・命令禁止表現・疑問詞も用いた句の増加」の点では、むしろ後退している。宗祇も一座する作品であるが、全般的に宗祇らしさはほとんど感じられず、むしろ、宗祇没後の「後期七賢風」の作品と総括すべきであろう。

『河越千句』……「心情形容詞の増加」と「体言止め下句末七字「三十四型」の減少」の二項目では、宗祇独吟である『三島千句』よりも、『葉守千句』に近い値が得られる。また「名所句の減少」「下句「サ止め型」の増加」の二項目でも、『熊野千句』より更に進んだ値が得られる。従って、非常に「宗祇風っぽい」作品ではあるのであるが、宗祇の風体の眼目とも言うべき「願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加」の点において、なお、『享徳二年千句』レベルの値しか得られず、その点で「宗祇風」の作品とすることはできない。連歌の風体が「七賢風」から「宗祇風」に変わってゆく過程での過渡的な風体と総括すべきであろうか。

『三島千句』……宗祇の独吟で、宗祇連歌の当時の姿そのものを示す作品であり、調査で得られた値は、五つの項目の全てで、「宗祇風」と呼べるレベルのものとなっている。とりわけ「願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加」の項目で、後の『葉守千句』に匹敵する値となっているのは、この作品を「宗祇風」と判断させる所の最も重要なファクターである。ただし、「宗祇風」と呼べるレベルではあっても、五項目全てで『葉守千句』の数値に及ばないのは、まだこの作品が「宗祇風」の成立過程の途上にあつたことを示すものである（注8）。

『美濃千句』……『三島千句』から比較して、「願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加」「体言止め下句末七字「三十四型」の減少」「下句「サ止め型」の増加」の三項目で値が後退する。特に、「願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加」の項目での後退度は大きい。それでも、『河越千句』以前のレベルまでは落ち込んでおらず、二者択一的には「宗祇風」とし得る作品であると考えられる。宗祇自身が既に「宗祇風」の風体を確立していることは『三島千句』において検証したごとくであるが、同座している専順との関係上、他の連衆との間に自らの手法を共有せしめることが十分にできなかったからであろう。「宗祇風」ではあるが、不鮮明な感のある

ものとも総括すべきであろうか。

『因幡千句』……『美濃千句』から比較しても、「名所句の減少」「願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加」「心情形容詞の増加」の三項目で、大きく値が後退する。とりわけ「願望表現・命令禁止表現・疑問詞を用いた句の増加」では著しく、『河越千句』以前のレベルまで後退する。これでは、とても「宗祇風」の作品とすることはできない。当該千句は、取り扱った『熊野千句』以降の作品中、宗祇が一座しない唯一のものであるが、当時の連歌が、宗祇が一座しないとどのようなものになるかということが知れるという点で、逆に貴重なものであるとも言える。風体的には「七賢風」の最末期のものとして総括できよう。

『表佐千句』……『美濃千句』と同じく専順・宗祇を主要メンバーとする作品で、得られる値も、五項目全て『美濃千句』と同レベルと言える範囲である。『美濃千句』と同様に、「宗祇風」ではあるが、不鮮明な感のあるものと総括されよう。ただし、『美濃千句』と比較して、五項目の全てで『葉守千句』の値に少し近づいているのは、その間に、連衆に対する宗祇の影響力がそれだけ大きくなっていったことを覗わせるものである。この二か月後（文明八年三月二十日）専順が没し、以後、「宗祇風」が次第に世を風靡するようになる。『葉守千句』は、そのメルクマールとなる作品と言えよう。

『三島千句』以前の宗祇の独吟百韻

以上、現存千句資料について、その風体が「七賢風」から「宗祇風」へと移行してゆく過程を検証した。では、宗祇個人のキャリアにおいて、その連歌が「宗祇風」の面貌を呈するようになったのは、いつ頃なのであろうか。幸いなことに、宗祇の場合、『三島千句』以前の独吟作品（注9）が多く現存している。それを検討してみよう。対象とするのは、次の八巻である。

- (a) 寛正二年正月一日「何人」（あまのとを）（注10）
- (b) 寛正二年九月二十三日「何人」（いはがねに）（注11）
- (c) 寛正四年三月某日「何船」（はらふべき）（注12）
- (d) 寛正五年正月一日「名所」（はなのほる）（注13）
- (e) 文正二年正月一日「名所」（ふじのねも）（注14）
- (f) 応仁二年正月一日「何人」（つきのあき）（注15）
- (g) 成立年月日未詳「何船」（はるはまた）（注16）
- (h) 成立年月日未詳「何路」（かすみかは）（注17）

右の独吟百韻八巻について、千句の場合と同じ①②③④⑤の五つの項目について調査すると、【表Ⅲ】の結果が得られる(注18)。数値の列挙だけでは、直観的に判断し難いので、得られた数値が、『三島千句』から得られる値の範囲であるなら○、『享徳二年千句』に近い範囲外の値であるなら×、『三島千句』の範囲を越えて『葉守千句』に近い値なら◎という記号に置き換えると(例えば③「心情形容詞の増加」で言う)、【表Ⅱ】のごとく、『三島千句』を構成する十巻の百韻において、心情形容詞の例数が最も多いものは第七「何木」の一、最も少ないものは第二「何船」の五であるから、得られた数値が五以上一以下であるなら○、四以下なら×、一以上なら◎となるということである)、【表Ⅲ】の結果は【表Ⅳ】のごとくとなる(注19)。(b)の寛正二年九月二十三日「何人」において、名所句が九句と、一句多すぎると一点を除いて、全て○または◎が入る。つまり、これらの百韻は、『三島千句』の各百韻と同等またはそれ以上に「宗祇風」な作品だということである。宗祇の連歌は、中央の連歌界にデビューしたその最初から、「宗祇風」であったということである。

注1…テキストは古典文庫『千句連歌集』第二冊を基礎とするが、ただし、諸本との校合や式目作法との対照によって、私がより正しいと考えた本文を用いる。以下、一々断らないが、この手法は、本稿で取り扱う全ての連歌作品に当てはまる。ただ

	a	b	c	d	e	f	g	h
	寛正二年正月一日「何人」	寛正二年九月二十三日「何人」	寛正四年三月某日「何船」	寛正五年正月一日「名所」	文正二年正月一日「名所」	応仁二年正月一日「何人」	「何船」(はるはまた)	「何路」(かすみかは)
①	4	9	5			6	4	7
②	14	15	17	14	15	19	18	21
③	11	7	10	8	11	7	9	8
④	18	18	17	18	16	19	11	16
⑤	0	2	0	0	0	1	5	0

	a	b	c	d	e	f	g	h
①	○	×	○			○	○	○
②	○	○	○	○	○	○	○	○
③	○	○	○	○	○	○	○	○
④	○	○	○	○	○	○	◎	○
⑤	○	○	○	○	○	○	◎	○

し、仮令依拠テキストの相違でデータに多少の増減があつたとしても、方法論的に、結論に大差は生じないはずである。

注2…テキストは江藤保定『宗祇の研究』資料編を基礎とする。

注3…宗祇は、名所を多くつかうまづるにや。当奉行・能阿も、好み侍る也。是は、ただ好むと侍らねども、事を広く覚えて侍るままに、似合ひたる事には取り出だして、おのづから付くる事也。

注4…接尾辞「さ」が付いて名詞化された例も含める。

注5…「はかなし」は必ずしも端的に心情を表現する形容詞とはいいがたいが、宗祇風連歌で非常に好まれる形容詞であるので、ここに数えることとした。ただし、それを除いても、結論が大きく相違することにはならない。

注6…同様の作業を、私は以前もう少し詳しい形で行っているのであるが、限られたスペースの中で、余りに細かく論を展開するのは、かえって論旨を不明瞭にするので、右の五項目に整理したものである。気になる向きは、拙著『連歌の新研究 論考編』第四章第一節「宗祇連歌との比較から見た宗祇連歌の特徴」を参照されたい。

注7…テキストは、『熊野千句』と『河越千句』は古典文庫『千句連歌集』第五冊、『三島千句』は金子金治郎『連歌古注釈の研究』、『美濃千句』と『因幡千句』と『表佐千句』は古典文庫『千句連歌集』第四冊を基礎としたものを用いた。また各千句の「追加」は対象外とした。

注8…この表現は、「宗祇風」の成立過程に關していうものであつて、連歌文芸としての達成度に関していうものではないことを御理解いただきたい。『三島千句』の連歌文芸としての達成度は極めて高いと私は考えているが、今、それを論ずる余裕はない。

注9…専順等他者の発句を立句として借用したものも含む。

注10…テキストは江藤保定『宗祇の研究』資料編を基礎とする。

注11…同右。

注12…テキストは、北海学園大学北駕文庫本の手写ノートを基礎とする。

注13…テキストは江藤保定『宗祇の研究』資料編を基礎とする。

注14…テキストは同右。成立には異説もあるが、通説に依る。

注15…テキストは同右。成立には異説もあるが、通説に依る。

注16…テキストは古典研究会叢書第二期『連歌百韻集』を基礎とする。文明六年の作とする本もあるが、それが用いられないことは、伊地知鐵男氏のそこでの解説のとおり。「寛正年間の成立か」とする両角倉一『宗祇連歌の研究』(四ページ)。

注17…テキストは江藤保定『宗祇の研究』資料編を基礎とする。両角倉一『宗祇連歌の研究』では文明五年以前として掲げるが、専順の発句を立句にしているので、(a)(d)等とはほぼ同時期の作と推定される。

注18…(d)(e)の①の欄が除外されているのは、この両百韻は、全句に名所を賦しとおす特殊な作品であるので、名所句の数は最初から一〇〇に決まっており、調査は無意味だからである。

注19…⑤については、『三島千句』においても下句「サ止め」の句が存在しないものがある。この欄が×となることはない。その点で余り意味はないが、全般の様子を直観的に把握する一助にはなるので、敢えて示す所である。